第四章　二人目の放火犯

1

二件の連続放火を果たす。

夏の盛りの季節で熱帯夜が続いた。

夕時になって、やっと、直射日光を遮ることが出来たが、トタン屋根は、いつまでも熱を含んでいて、部屋の中はなかなか涼しくならなかった。

末広、連雀、元町、新富などこのあたりは旧市街でも由緒ある街並みで、寺院や、昔ながらの蔵造りの商家などがあった。

左知子の住む三光町とは一キロの範囲内になる。真夜中のことで寺門は閉ざされていたが、脇の潜り戸の下は人が一人もぐり込めるぐらいの隙間があった。

別にどこを狙ったわけではない。行きはぐれたのか小犬が一匹、寺門のそばの石塔の陰でくんくんと鳴いていた。それで自転章の足を止めた。

小犬が可愛いと思ってのことではなかった。

左知子は犬は嫌いであった。鼻をすり寄せて来た時、左知子は追っ払った。犬の臭気を移されそうで、近寄らないように威嚇した。

境内には人の影はない。

ひとわたり見回したが、石畳の白さが浮いているだけで、堂宇は暗さの底に沈んでいた。

左手奥に、わずかに墓地の領域が望めた。墓石の白さが眼に止まった。すぐ近くに、左知子は火の対象物を見つけ出す。藁（わら）づとで樹幹を包まれたナツツバキの木があった。白い椿の花は

すでに腐れ落ちて愕片（がくへん）だけが枝先に残されている。全体にこんもりとした感じでニメートル足らずの木は青黒い葉叢を広げていた。

樹幹の中央あたりにまだ新しい藁づとが、荒縄で二重巻きにされている。

左知子は藁づとは虫除け用で防寒のためではないと聞いたことがある。まだ、夏のさなか、防寒の必要もなかった。幹に付く小虫が、藁の中に飼われ、冬を越すのである。

早々と花の終りに、ナツツバキの木は新しい装いを施されたというわけだった。

いかにも火を付けてくれと言わんばかりの身の衣であった。左知子は、マッチで火を付けた。

が勢いよくは燃え上らなかった。藁はたやすく燃えたが、それだけに燃えつきるのも早かった。

なんだかつまらなかった。

それでも一応は樹幹の回りに火は移り、樹幹の生肌が焼かれて、ぱちぱちと火の爆ぜる音がした。小さな虫がすでに棲みついているなら、今頃は火に焙られているのだろうかと思った。

だが、焼かれる様を目撃したわけではないからもう一つ気持が昂まらなかった。

小さな火だから人が騒ぎ立てるほどのこともない。ぼんやりと寺院右手の幼稚園舎の方に眼を向けた。

ジャングルジムや、くねくねと曲がったすべり台などが無人の闇の中におかれている。

左知子の焦点がやっと定まる。

あれは何の機械だろうと、まるで別のことを考えていた。それから……人間の子供たちの顔が思い浮かんだ。意識のどこかに、生まれたばかりの和彦と美里の赤ん坊のことがあった。

姿形のない幼児たちが闇の中で声も立てずに遊んでいる様が頭の中に描かれた。誰れの子供も、

みんなこましゃくれた顔をしていた。
いつかこの幼稚園の正門脇の路上で、左知子は一台の赤い車が母子の列に飛び込みそうになったのを目撃した。
白い作業衣を着た、にきびだらけの若者が運転していて、すんでのところに、送迎バスを待っていた騒々しい一団に突っ込みそうになったのである。自動車修理工場の若者で、赤いスポーツカータイプの外車を慣らし運転していたのだ。自分の体の一部だと思えば、危険なハンドル捌（さば）きに賭けてみたくもなる。
あの時、何人かの母子の組は死んでいたはずだった。わずか〇・五秒差、その時のことを考えたら、今度は自分が殺さねばと思うようになった。
もう、黒い焦げ跡だけを残す藁づとは、わずかに煙を立ち昇らせているだけだった。
左知子はすたすたと、石畳の道を横切り、右手奥の幼稚園舎に近付いた。
勢いよく、ぱーっと燃え上る火の強さのことを思った。ところが、寺院の境内と幼稚園の敷地とは低いコンクリート塀と金網で仕切られていた。
一メートルほどの高さのコンクリートの仕切り塀の上に、さらに一メートルはある金網が張ってあった。これでは左知子の身長と、病巣部の傷みを持った体では到底、塀を越えることは出来なかった。
くうっ、くくうっと眼の上の鳩舎で、数羽の鳩が鳴いた。人の近付いたことを誰れかに知らせようとしていた。左知子はあきらめ、元来た道へと踵（きびす）を返した。
寺門の潜り戸の下を抜け、一度、表通りに出て、幼稚園舎の前に立ったが、中に入り込める余地はなかった。まだ気持は晴れてはいなかった。
自転車を走らせた。風になって夜の街を走り抜

ければ嫌な思いが拭われるかと、左知子はペダルを漕いだ。
三光町の方角に向っていたが、まだ下腹部に痛みが来なかったので、そのまま辻々を曲がって西武線本川越駅あたりまで出た。
腕時計を見たら午前二時半になっていた。
古臭い建物が線路脇にあることを思い出す。
武州倉庫の空地の前に立った。
線路に平行して古い土蔵が何棟か、一つに列なってあった。漆喰塀（しっくいべい）の蔵の上部は、庇上（ひさしうえ）観音扉になっており、鉄製の閂（かんぬき）扉が表戸には嵌め込まれていた。
川越大火の時もこれらの蔵造りの建造物は大部分は焼け残ったと伝えられる。おそらくはこの古びた土蔵も火の被害を受けずにすんだのだろう。
土蔵の内部には、今も昔のままの暗い空気が棲みついていそうに思えた。
成育の悪い向日葵（ひまわり）の枯れた花茎が砂地の上に、五、六本突き出ている。早々と夏の花を咲かせて大輪の花は命を果てたのであった。
左知子は、古い建物のかび臭い匂いが嫌なのであった。蔵の内部にはたしかに気分を悪くするかびの花が咲いているに違いなかった。
火を付けてやりたいという思いはあるのだが、古い土蔵はどうにも手の付けようがなかった。
余程大量のガソリンでも撒かない限りそれは無理だった。土蔵は数えてみると棟が五つあった。
しばらく対峙していたが、やはり、火の対象物ではなかった。それで、横這いに歩き、構内の隅まで、体を移動した。
夏草が構内の隅には猛々しく茂っていた。
背高の雑草が群れていた。
その一郭に堆高（うずたか）く積まれた古タイヤの山があった。危険物貯蔵所と記されたコンクリー

ト小屋の横に重油で汚れた缶が無造作に並べられていた。左知子は火の対象物を見つけ出した。
重油缶を手にしたらべっとりと手に汚れた重油がついた。匂いもかなり強烈だった。
コールタールの匂いがした。
どろどろした油を、古タイヤの上に撒く。古タイヤは三十本はあった。汚れた手でマッチを擦った。
火が斜めに走り、黒い煙が風の方向を示した。燃え広がるのは早かった。黒い狼煙（のろし）が上げられていた。
予想していたより素早く火が走り、壮大な狼煙が立ったので、左知子は少しあわてた。
その時、表通りで誰れかが叫ぶ声を聞いた。
火を放って一分とはたっていない。
それなのにもう誰れかに発見されていた。
土蔵の方角に左知子は走った。
ちらと後を見たら、自転車に乗った男が煙の向うに姿を現わした。風向きが変り、その時、左知子は煙幕の中にいた。
煙が　左知子を隠してくれた。
きっと町内会の男たちで結成されたという自警団の連中に違いなかった。左知子は自転章のある場所まで駆け、男が現われた方角とは逆な道に出る。
懸命に自転車を漕いだ。
いくつかの小路を曲がった時、左知子は下腹部に痛みを覚えた。空地に自転車を入れ、その場所で体を休めた。考えてみればニキロほども夜の街を駆けていた。
三光町とは隣り合わせの中原町内にいた。
しばらく暗闇で息を整えていたら、とつぜん、人の影が左から右にと動いた。
空地の前の道路に一人の男が姿を現わした。
「あつ」左知子は自分の声をのんだ。
自分の姿を見られたのではないかと思った。

小走りに駆けて来たのに、男は急に空地の前で歩様を緩めたのであった。
空地には隅にホロ掛けした建材が積まれていた。
用心深く左知子はその陰に自転車をおいていたのだが、自分の体は段差になった建材の低い部分の上においていた。
ちょこんと腰掛けていたのである。
左知子はホロの上にぴったりと上体をかぶせた。
一段と暗い場所だったので眼が慣れないと識別は難しかったかも知れないが、動くと相手には見つかってしまいそうだった。
ところで、驚ろいたことに、男はぴたっと足を止め、電柱の陰に身を寄せた。
立小便でもするのかと左知子は一瞬考えた。
男の立っている場所と左知子の潜んでいる場所は二十メートルほど離れていた。
その時、またまた驚ろいたことが起っていた。
空地を隔てた道路の向こう、四十メートルは離れていない小学校の校庭の隅にめらめらと火の手が上った。道路の向うには民家が疎らな感じで建っていた。畑地が大部分を占めていたので見通しが利いた。どうやら火の手が上ったのは物品倉庫のように思われた。
佐知子には覚えのない火の手であった。
予期しない展開となっていた。
眼の前に現われた男も放火犯人なのだろうか。
やっと、男の妙な仕種に気付いた。
電柱の明りが男の横顔を照らし出している。左知子の視線は男の下半身に向けられた。
「ふっふっふっ…」と男は息声をあげているように、左知子には感じ取れた。
男はズボンのチャックを外し、おのれのものを取り出していた。何をやっているのか。左知子にはもう理解出来た。

いま、男は異常興奮を示しているのだった。電柱で身を隠しているように見えるが、体は火の方角に半ば向いていた。
男だけの秘密をこの時、はっきりと左知子は眼に止めた。左知子なりの解釈を加えれば、この男は、火を見ることで、性欲の充進を来たす性癖の持主だった。どこか彼女自身の、昂まり方と似ている。左知子はそう思った。
下半身は電柱の陰になっていたので、一部始終をたしかめることは出来なかったが、男が自慰の行為に耽ったのは間違いなかった。
五分ばかり、火の方角を見ていたので、左知子は男の顔をしっかりと眼に止めた。
細い限に特徴があった。ほっそりとした体躯で、身長は一メートル七十近くあった。
年の頃は二十前後、若い男だった。
もう、射精行為を了えたのか、男は電柱の陰でただ火の方向を見やっていた。
左知子はこの男のちょっとした癖を眼に止めた。
鼻の頭をしきりにさわる。“自慰を楽しむ男たちは鼻の頭をこする癖がある”何かの雑誌にそんな他愛もない記事が出ていた。
何となくそのことを思い出し、男の仕種が気になった。が、不意に男は左知子の視野から消えた。
さっきから左知子はこの男のあとをつけてやろうと考えていた。慌てて男のあとを追った。
電柱の場所まで飛び出し、男の去った方角を見たら一つ先の辻を左に曲がるところだった。
自転車はそのままにしておいた。
小走りに角まで走る。一本道がずっと続いている。
男は道の傍らに身を寄せ少し急ぎ足で歩いていた。
気付かれぬように左知子は忍び足で男を尾行した。二戸建ての賃貸し住宅が右側の道には十戸ばかりも並んでいた。左側は、植木畑で、家並みはその先にあ

った。五十メートルほど先はごちゃごちゃした感じで、家が建て込んでいた。
左知子は距離を詰めた。ほぼ三十メートル後にいた。距離をせばめたのに、その男は早足になったのか、また距離が離れた左側の住宅地の一郭に男は姿を消した。尾行されていることには気付いていないようだった。それでも一度後を振り返り、あたりに眼を配った。左知子は電柱の陰に身を寄せて、この男の歩様を観察していたが、男に合わせ足を止めた。
自分と同じ気の配りようをすると思った。
あとは小走りに、男の消えた地点まで走った。
だが、もう男の姿はなかった。
耳を澄ましてみた。
この一郭の家に入ったのなら、扉を開閉する時の音がするのではないかと患った。音は何もしない。
だったら、男は尾けられていることに気付いてどこかの暗闇に身を潜ませているのか。
左知子は一歩も進めずにいた。
このまま進めば、逆に男に自分の姿を見られてまう危険性があった。それで、あきらめた。
また、自転車を置いた空地まで戻った。
小学校の校庭の物品庫はもう高い炎を上げていた。危ないところだった。人が出ていた。
道路側には人の姿はなかったが、畑地のあたりで人の姿を見かけた。左知子はまた追われるようにして自転軍を引き出し、男を尾けた道の方角にと自転車を向けた。最初の角は左に曲がらず、右にと道をとった。
雑木林があり、その前の道を走り、大きく迂回して、三光町の方角にとUターンした。
放火犯人がもう一人いる……何だか、心がきゅーんと締まった。演ずる側ではたく、見る側の一人になったことで、心がときめいた。
もう一人の放火犯人に大いに興味が湧いて来た。
家に帰り着き、暗い台所口から部屋に入った。重油

がまだ手指にこびりついていて左知子は嫌な匂いを嗅いだ。手を洗いたかったが、水道の蛇口をひねると音がして父親が目覚めると思った。
さっき眼にした若い男の横顔が浮かび、怪しげな行為のことが思い出された。
咽喉がからからになっていた。
スリリングな場面を擦り抜けてきたので、左知子は時の経つのを忘れていた。
ふっと一人になったら、男と同じことをしたくなった。緊張した時間から解き放たれたら、体に淋しさの情が湧いた。そっと、股間にあるものに触れてみたかった。
が、手指には嫌な匂いを放つ油垢がこびりついていた。汗がみぞおちを伝って流れている。
着衣を脱ぐことも出来ない。
と、その時、隣室から、
「おい、左知子……」と梯吉が呼んだ。
不意のことだったので、左知子はびくっと体を震わせた。梯吉はずっと目を覚ましていたのだろうか。
すぐには返事が出来なかった。
…五秒、六秒と時間が経過して行った。
返事をするにも最初のことばが口から出て来なかった。夜の彷徨（ほうこう）のあそびを梯吉はすべて知っているのかも知れない。
妙な脅迫文を勝手口の土間に落しておいたのは 父親の仕業なのだろうかーいや、足の萎えた身ではそれは無理ではないか？ 違う、這って出ればそれくらいのことは出来る？
左知子は、重苦しい沈黙の時間の中で、それだけのことを考えた。
とうとう左知子は一言も発しなかった。
ことばを呑んだまま、隣室の父に対した。
考えてみれぱ、ぐっすり寝込んでいれば、父の声は聞えないということになる。狸寝入りをしたことにな

るが、その翌日、梯吉はこのことについて何も言わなかったので、左知子は知らぬ顔を極め込んだ。

2

その二日後、左知子は隣家の男、田尻義和に、妙な誘いを受けた。
夕刻、外出先から帰って来た左知子は、ぱったりこの男と鉢合わせした。
どうやら、そのタイミングを図っていたようだった。玄関口脇の植木の陰から、ひょいと、男は現われ出た。
「あんたとよ。話をしなければならないことがあるんだよ」
「はあ？」
「今夜、うちの奴はいないから、夜の九時、家に来てくれないかな。大事な話だよ」
「……」
太った丸顔の顎は下から見ると二重になっている。ぶつぶつと無精ひげが生え始めているのが見えた。
やっぱり、この時も返事が出来なかった。
「来なきゃあ、こちらから行くよ。いいな」
それだけ言い残すと、また、自分の家に男は戻って行った。〝話をしければならないことがある〟脅迫文の文句とは違っていたが、脅迫されていることには変りはなかった。
左知子には脅迫文の主はこの男のようにも思われた。実際に彼は行動で示して来たのだ。
左知子は鬱陶しい気分のまま時間を過ごした。
迷っているのではなかった。
話があるのならお望み通り、顔を出してやろうと思っていた。鬱陶しさは、生理的な嫌悪感を覚える男と一対一で向い合わたければならないことにあった。
田尻は、執念深く、左知子の行動を見張っていたの

かも知れなかった。いつか、隣家の便所の窓の開閉が気になって以来、左知子は窓の状態に気を止めるようになった。大低は半開きになっていた。

と言って、そこに人の影を認めたのでもなかった。

塀に沿って半身を屈めてすすみ、開け放ったままの勝手口から左知子はすべり込む術を身につけた。

もっとも、田尻に一晩中、彼女を見張っている根気があれば、一休止あってから勝手口の木戸を閉めるのかも知れないし、その行為は眼にすることが出来たかも知れない。

夜の九時きっかり、警察にでも出頭する気で、左知子は隣家を訪れた。

玄関口に立ったら、寸秒を入れず田尻が現われ、

「まあ、上れ上れえ」と、機嫌のいい声で迎えた。

夕時の声の調子とは違っていた。白い丸首シャツにステテコ姿、手には団扇を持っていた。

「ここではいけないんですか」

「なに言ってる。立話ですむことじゃないよ」

また、語気が強まった。

仕様がないから、左知子は田尻の背に従った。

平屋建てで、部屋は三つあり、左知子は真中の六畳間に招じ入れられた。

田尻はテレビを見ながら、ビールをのんでいたらしい。ビール瓶とコップを台所へ持って行く。

どこか落着きがなかった。

座蒲団が部屋の真中に二つ並べられていた。

「あいつ、信州の田舎の夏まつりだから。それで二日ほど居ないんだよ」

太った連れ合いのことを口にした。やっと、テーブルを前に、田尻と左知子は向い合った。

「あの、話って何です？」

「そう、詰問調で言われてもな」

「用件だけきかせて下さい」

「あわてなさんな。そうそう、これじゃまるでムード

なしだ。左知子さん、ワインでものむかあ」
「いえ、わたし、いいです」
断わったのに、田尻はまた席を立って、サイドボードの硝子戸を開け、秩父産のワインと、ワイングラスを二つ取り出した。
「ほんと、わたし、いいですから」
「まあ、そう言わずに。若い女の人と二人っきりになれたんだからな」
勝手に左知子の眼の前のワイングラスにも赤紫色の液体を充した。
「その、何だ、話はいろいろあるんだが、いまあんたんとこ立退きを迫られているんだろ。ま、悪い連中に引っ掛かったものだよ。だけど、買叩かれちゃうからな。よかったらね、いや、本心を言えばぜひぜひにということなんだが、なんならわたしんところがね、同じ地所続きだから、あんたんところが売らなきゃならないんなら買い取ってもいいと思っているんだよ」
「そういう話ですか」
「そうすればさ、すぐに立退けって連中みたいなことはわたしは言わないよ。ずっとじゃ困るけど、そこそこ目処（めど）がつくまでは、長い付き合いだ、わたしとしては追い立てるようなことはしないつもりだ」
「でも権利書はむこうに」
「だからそこは債権者と話合いさ。何ならわたしが間に立ってあげてもいい。こういうことは社会的な経験者がいないとね」
左知子はじっと田尻の顔を見ていた。
この男は親切気なことを口にしたが、さっきから左知子の全身を舐めるようにして見ていた。
「ま、それはそうとしてだ」
田尻は、自分で注いだワインを口に持って行く。一口のんでから、今度はちょっと怖い顔付きになった。初めて左知子の顔を真正面から見据えた。

「夜になるとね。ほら川田さんちの犬がよく吠えるんだよね」
　さわら垣の家の犬のことであった。
「それも明方に。あそこの犬が明方になく時は、どういうわけか、放火騒ぎがあるんだ」
「……」
「どうしてだと思う？」
「さあ、そんなこと言われても」
「左知子さん、いまのままではよくないと思うんだよ」
「……」
　何がですかと言いそうになって佐知子は口を噤んだ。少しく、心のうちが動揺した。
　田尻のワイングラスを持った右手は中空に浮いていた。左知子はこの時、下唇をきゅっと噛み締めた。その表情を掬（すく）いとるような眼で見、田尻はまたワインに口をつけた。
　一口のんでから、きちんとテーブルの上にワイングラスをおく。ゆっくりと、正確にグラスの底をテーブルの上に置いた。
「もう町内会でも、このところの放火事件は大問題になっていて、白警団組織の寄り合いにもこの前顔を出したよ。絶対に犯人は自分たちの手で捕まえてみせるとみんな言っている。もう止めたほうがいいと思うよ」
「わたし、別に……」
「問い詰めようというのではないのだよ。わたしさえ黙っていれば、これまでのことはわからないんだから。えっ、そうだろう？」
「わたしが放火犯人というわけですか？」
「いいかげんにしろっ！なにもかもわかっているんだから。怪しいんだよっ」
　テーブルがどん！と叩かれたので、左知子はびくっと体を震わせた。　小柄な女が、太った大き

な男に見据えられていた。男は肩を張っていた。
「中学生時代の左知子さんはとても可愛かった。わたしらにもこんにちはって明るいあいさつを返してくれたものだ。ところが、この頃じゃ、まるで人が変ったみたいに、あいさつもしない。なあ、素直な気持がいちばんだよ」
「わたし、もう帰ってもいいんですか」
「待て、待てえ、それじゃ、わたしが、お前の怪しい行動のことを、警察に言ったらどうなる？」
「言えば？わたし、何もしていないんだから」
「ほんとうにそう言い切れるのか」
「ええ、わたしにはボーイフレンドがいて、父がああいう具合いですから、父が寝ている間だけ一緒に過ごしているんです」
「……ふむ、そんな話ってあるかな」
「脅迫文を投げ込んだのはあなたですか？」
「脅迫文？なんだそれは？」
今度は左知子が逆襲に転じていた。
「脅迫文とは穏やかでない。あんたは他の誰れかにも尻尾を掴まれてるんじゃないか」
田尻の顔色だけでは、この男が脅迫文の主なのかどうかは判定しかねた。
「ともかく、話はちゃんとつけておこう。これはあんたのことを考えてのことだよ。あんたの怪しい行動のことは黙っておくとしてだあ」
「わたし、怪しいことなんか……」
「なに言ってる。ここへ来たことからして怪しいんだよ。やましい気持があるから、ここへ来たんだろ」
「それじゃ、怪しいとして、一体、何が条件なのですか？」
「そうだな。若い女の子を一度抱いてみたいと前から思っていたんだ。そのへんの話でどうだろうな」

急に田尻の声は低くなった。
舌なめずりしている男の表情が見えた。
「その話、ひとまず訊くとして、あなたが秘密を守るって保障はどこにあるんですか」
「どうだ？これからのことは、わたしが左知子さんを強姦したってことにしては？男と女のことはね。警察というところは九十九パーセント、女の味方だって言うよ。二人っきりのことだから証人はいない。左知子さんだって大学まで行ったんだから、自分を 有利にする話ぐらい出来るだろう。まかり間違うと わたしは強姦犯人にされちまうってわけだよ。迂闊（うかつ）には警察に密告も出来ないってことになる」
間の抜けた男に見えたのに、田尻はしたたかなことを言った。なかなか計算がしてあった。
だが、左知子は黙っていた。
“どうぞ” とでも言えば自分が放火犯人であることを認めることになると思った。
左知子もこのへんのところはしたたかな計算をした。ぬっと田尻は席から立った。
そのまま立って行って隣室との境の襖を開けた。左知子が見ると、一組の夜具がすでにそこには敷かれていた。
「さあ！来いって！」
後から首っ玉を掴み取られた。
体が引きずられていた。
「止めて下さい！」
「いいからいいから。どうせこっちは、強姦犯人なんだから」
後ろにのけ反った左知子は両手を引っ張られ、そのまま襖の敷居のところまで引きずられて行った。否応なかった。小柄な体だから、次の部屋にやすやすと連れ込まれた。
今度は、男が体の上に乗って来た。

「いいかげんにしてよ。止めてったら」
大きな声を出したが、力ではかなわなかった。
男は両膝の間に左知子の下半身を挟み込む。双手上げの恰好にされた佐知子の両手を上から押さえ付けた。体の自由を奪っておいてから、唇を擦り付けて来た。
左知子は唇を奪われまいとしてしきりに首を左右に振った。が、そんな抵抗も空しかった。
男の唇が左知子の唇に合わさった。左知子は息を詰めた。歯を噛み締めていた。本当に息が苦しくなり、強く首を振った。やっと唇が外れた。
息を吸った時、ワインの香気を嗅いだ。
この男には応わしくない香気だった。
「な、いいだろ」
男の右手が下がって来て、左知子のジーバンのジツパーを探った。やはり動きがとれないので為すがままに任せるしかなかった。
もっと、その手はあつかましくなって、ジーパンのバンド部分にかかり、脱がせにかかった。
男の腰が少しだけ浮いた。
左知子は離れようとしてこの機に、腰を捻った。男の重い腰が押さえつけにかかる。その時、左知子は、「うつ……」と呻きの声を発した。
あの、下腹部の病巣部にずきっとする痛みが走った。奥深い部位が鋭く抉られていた。
男はお構いなく、ジーパンの縁に手を掛げ、下におろそうとした。左知子は起き上ろうとし、上半身をもたげた。
「痛い！あっ……止めてったら」
また、ずきっと痛みが刺さった。
初めて、男は驚ろいた顔になり、上から左知子の顔を覗き込んだ。
「手術したあとが、痛むの、わたし……」
眼の前が二重三重に見えた。

手術したことは田尻も知っているはずだった。
「おい、お芝居じゃないだろうな」
未練がましいことを言う。
左知子の顔を見ればわかるはずだった。
血の気が引いて行くのが左知子にも知覚出来た。
事実、この時の左知子の顔は真蒼になり、脂汗が額には浮いていた。
苦痛に歪んだ顔を見れば芝居かどうかはすぐにわかった。
「おい、大丈夫か。そうだ、気付け薬にワインをのめばいい」
どこか遠くの囁き声に左知子には聞えた。
田尻は、左知子が口を付けなかったワイングラスを、左知子の口のところに持って来た。
「これをのめ。さあ」
口元にワイングラスが持って来られた時、左知子は右手で田尻の手を払った。
ワイングラスは飛び、赤紫色の液体があたりに香気を撒き散らした。
「おい、なにをする！」
気色ばんだ田尻が叫んでいるのが聞えた。
体は動かしたくないのに勝手に、左知子の右手だけが、男の親切ごかしの行為を阻んだ。
左知子はしばらくじっとしていた。
めまいがおさまるのを待った。
“ああ、こんな男に犯されなくてよかった”
瞼の裡に、白い輪がいくつもいくつも跳びはねていた。眼頭にじーんとした感じがあった。
耳鳴りもしている。
ここがどこかも忘れて、左知子は、和彦の名を頭の中で呼び続けていた。“和彦、救けて…”左知子が呼ぶ男の名は和彦しかいなかった。
何分か経って、左知子はやっと正常に戻った。
帰ろうとしたらこの嫌らしい中年男は、

「これであきらめたわけじゃないぞ」
と、なお未練がましいことを言った。
「強姦未遂でしょ。警察に言うより奥さんに今夜のこと言ってあげましょうか」
左知子はもう気丈な女に戻っていた。
田尻はなにやら口の中でぶつぶつ言ったが、左知子には聞き取れなかった。

3

「赤ちゃんてとても柔らかいから見にお出でよ」
と、電話口の向うで美里が言った。
「いいよ。わたし、あの、赤ちゃんの匂いって好きじゃないのよね。母乳の匂いって胸が悪くなるもの」
「あのね、もう名前付けたのよ。和美にしたの、和彦とわたしの一字ずつをとったのよ」
「へえー、安易な発想ね、ねえ、和彦そこにいたら代って」
「あら、いないの。夏休みなのに学校の子と秋ケ瀬渓谷に行ったのよ。明日帰るわ」
「美里、電話切るよ。お客さんが玄関に来たの」
相手の返事を待たずに、左知子は少し乱暴に受話器を置いた。“なにが赤ちゃんよ”と腹を立てた。客など来ていなかった。
気分がすぐれなかった。
今年の夏は、七月の末頃と八月のお盆前後にかーっと暑い日が続いただけで、あまり夏らしくない日々のまま今日まで来た。一足跳びに秋にでなるのか、朝晩急に冷えた。
それだけではない。
病巣部がちゃんと雨の日が来ることを知覚していた。どこと言って探し当てることは出来ないのだがじわーと来る鈍痛が、左節子の傷の奥には生

じていた。
　このところ、和彦と会いたいという気持が募っていた。隣家の男との肌が粟立（あわだつ）つような時間を過ごしたことで、すっかり気が滅入っていた。屈辱的な体験のことを思うと、今でも腹が立った。きのうは日曜日だったので、左知子は午前中一杯、喜多院の境内で、和彦を待ちわびて時間を過ごした。
“これからは日曜日の朝はいつもここへ来ることにしようかな。いい散歩コースになるよ”と再会した日のこと、和彦は言った。
　それで、五百羅漢近くのベンチの一つに坐り、左知子は和彦を待ったのであった。
　文庫本を一冊ポケットに入れて、読み始めたが、いつか読む気がなくなった。
　二時間ほどもぼんやりと坐っていた。
　美里の話だと和彦は林間学校参加の用があり、日曜日は東京郊外の秋ケ瀬渓谷にいたことになるのだが…。和彦を待っていたその日のことを言えば、ずいぶんと間の抜けた時間を過ごしたことになる。
　だが、その日、左知子は中原町の小学校の近くまで行った。若い男を見失ったあたりである。
　自転車はゆっくり漕いだ。
　もう一人の放火犯人のことはあれ以来、ますます彼女の興味を駆り立てた。
　よく似た造りの家が並んでいた。
　旧市街地だから三光町の街並みなどとも似ていた。新しい家は大抵は、同じ敷地内に建て直したものだった。男を見失った地点の奥は、小路が入り乱れていた。余り区画整理が行き届いていないので、雑多な感じで大小の家が立ち並んでいた。
　その、どこかの家の一つに、あの若い男は紛れ込んだのかも知れなかった。道を歩いている若い

男がみんなあの放火犯人の顔に見えたが、誰れも違っていた。
特徴のある細くてやや吊り上った眼の男には行き会わなかった。結局、無為に終った。それでも川越市内に住んでいる男だということはわかった。
行動範囲は限られているものである。
美里から電話があったあと、左知子は、また喜多院の境内にと自転車を入れていた。
鳩が群れていたので、ハンドルを急に切り、鳩共を追い立てた。同じことを二度やった。
左知子は気が付かなかったが、この時、例のステッキを持った老人がベンチにはたまたま坐っていた。自転車のハンドルを右に左にと切る女の一部始終を見ていた。
治療費は工面して払ったのだからとやかく言われる筋合いはなかったが、この老人の眼はその時また、怒りを表わした。
老人は席を立って来て、左知子の乗っている自転車の前に立ち塞がった。
「お前、なんのつもりだ。えーっ」
「また、あんたなの」
「あんただと？質の悪い女だ」
「馬鹿みたい」
もう左知子は相手にしなかった。ハンドルを切り、老人の横を素早く通り過ぎようとした。
と、老人は自分に自転車がのしかかって来ると思ったのか、いきなり、右手のステッキを前輪の輻矢（スポーク）部分のあたりに差し込んだ。
それで、左知子はハンドルを取られ、自転車ごと横転した。スピードは出していなかったが、土の上に投げ出された時、手足を擦り剥いた。
「はは、あの女の子の仇を討ってやった。どうだ、痛いってことがわかったか」
みんなの眼が左知子に集まる。同情的な視線だ

った。もうこれ以上、こんな老人と関わり合うのは嫌だった。土を払い、傷口に唾を塗りつけてから、横倒しになった自転車を起こした。
老人を無視し、佐知子は自転車に乗った。人々の非難の眼に老人は、自分の正当性を主張するためか、「あの女はこの前……」と、衝突事故のことを何かまくしたてていた。
その我鳴り声を後に、左知子は喜多院の境内から逃げ出す。境内の外に通じる泥棒橋を渡って小仙波町の一郭の少年の家に行く。
この日はコースを変えて走った。
泥棒橋というのは、この橋を渡り喜多院に入れば、どんな大泥棒でも改心が出来るという言い伝えから、この名がついた。
葉崎家に行き、家庭教師の仕事を果す時間になっていた。玄関のチャイムを押したら樹里が待ちわびていたように顔を出した。
「誰れもいねえんだ」
「まあ、のんびりやりましょう」
「今日は、あ、そ、び」
もう樹里は左知子の体に興味のあるようなことを言った。二階の勉強部屋に行く。
窓から生ぬるい風が入って来た。
その向うには喜多院の深い森が見えた。曇り空になっていたので、樹々の緑は黒々としていた。
「あら、いいとこあるのね」
樹里は二つのコップにレモンサイダーを注ぎ、その一つを左知子の前に差し出す。
「ねえね、宇宙ファンタジー、買ったばかりなんだ。聴いてみる？」
いつもなら、音楽を聴くこともないのに樹里は少しばかり浮かれていた。ＣＤのシンセサイザー

の曲が流れ出す。
「あのね、やっぱりサッコ先生、くびになりかけたんだよ」
「なーに？わたしが、これ？」
音が大きいので、樹里は左知子の耳元で我鳴るようにして言った。それで左知子は自分の首に手をやり、首を切られる真似をした。
知らぬ間に、樹里は左知子の隣りに異常接近していた。
「ぼくがさ、体を張ってサッコを守ったんだあ」
「いいこね。お礼のキスよ」
お礼の意味も込めて、左知子は樹里の煩にちゅっとキスをしてやった。
「うわー、感激！これだもんな」
「さあ、わたしの好きな因数分解の演習問題でもやってみる？」
「今日はむずかしい話はなし。ぼく、サッコを守ってあげたんだからさ」
「なに？ギブアンドテエイク、なかなかせまるもんね」
左知子は上機嫌といった顔をしてみせた。
樹里の額にはニキビが噴き出していた。
「先生の特技を待ってたんだあ」
甘えた声を出す。ぺろっと舌も出した。
「まあま、樹里は可愛いと思うよ」
「それ、好きってこと」
「ばーか、ひよっこのくせして」
「そんなんじゃないって。ほらあ」
もう、樹里は左知子の胸にさわって来た。
「おーくすぐったい。可愛いもんだ」

左知子は体をそらし、ちょっと逃げた。
「ねえ、ずっとサッコ先生をクビにしないって約束出来る？」
「もちさ。や、ら、せ、て、くれたらね」
「それは高校に合格したらでしょ」
「少しはいいじゃんか」
「少ーしね、どこまでのことかしら」
「ね、サッコ先生、キスして」
「よしよし、それじゃちゃんと正座して。樹里は眼をつむりな」樹里は言われた通りにした。
ほんとうは先程の老人との一件があったので気持はむしゃくしゃしていた。
肘の擦り傷のことにはこの少年は気が付いていない。それどころではないといった感じである。
左知子は今度は正面向きになり、神妙に眼を閉じた樹里の唇にそっと自分の唇を押し付けてやった。男なのに柔らかな感じだった。
少年には違いなかったが、向い合った二人は、恋人同士のようにも見えた。左知子が唇を離した時、樹里の正座した下半身に 眼をやったら、ズボンの上にふくらみが出来ていた。
「ね、きのうは何回？」
「二回だけ」
「それ以上はだめよ。頭がぼおーとしてしまうんだから」
「サッコ先生の言う通りにしてるよ」
別に恥しそうな顔はしなかった。
欲求をちゃんと処理する方法だって受験勉強の効率を高めるのに役立つ。
「今日は手伝ったげようか」
「やったあ！させてくれるんだ」

「それはまだお預け。赤ちゃんでも出来たらどうするのよ。あー嫌だ嫌だ、狸みたいなお腹になっちゃって、こわーい思いして赤ちゃん生むなんてわたしはいや、おまけにぶよぶよしていて赤ちゃんてとても気味が悪いんだって」

左知子は、美里への憎しみの分も込めてべらべらとしゃべった。自分なりの悪態を吐いてから、首をすくめた。それから、さっと手を出し、樹里のズボンのふくらみの上に手を置いた。

「こうだもんね。やる気になってるウ」

「わっ、凄い感じ」

「ひとつ、しごいてやるか」

姉と弟のようにも二人は見えた。

「樹里、そこに寝てごらん、あお向けがいいな」

「手術されちゃうの？」

「そう、ホーケイかどうか先ず見たげるわ」

左知子は長々と畳の上に体を伸べた樹里からズボンを剥ぎ取った。先ず、びょこんと弾かれたような感じで、樹里の性器が飛び出した。

白くて細長い。

まだ子供だと思っていたのに、堅そうな陰毛がもう大人の表情をそこに作っていた。

「よーし、しごいてやるぞー」

あくまでも無邪気に左知子は振舞った。

ほんとうは自分でもかなり興奮していたのだが、少年の前ではそんな素振りは見せなかった。

「樹里のは半ホーケイってとこ、可愛いおチンチンしてる。いいぞお」

「早くしてよお」

「はいはい、さあてと、テッシュペーパーを用意してと、よーし、スタンバイＯＫよ」

左知子は少年の股間に突き立ったものを指の間に入れた。はんとうは恐々手に触れていた。
五本の指で包み取る。男たちの自慰の様子を眼に止めたことがあるわけではないから、それほどの余裕はなかった。
むしろ稚拙な手付きであった。それでも、しごくということばのままに指を上下させたら、少年の先端部が露頭され、指の動きにつれて見え隠れした。男の体特有の饒えた匂いを嗅ぐ。
かなり強烈な芳香だった。
だが左知子には快い風の匂いに思えた。
赤い露頭部がとても可愛いと思った。
いや、少年の示したこの開放的な性具は近くで見るせいか、とてつもなく大きなものに見えた。
いつか美里の言った“こわいこと”の意味が実感として伝わった。
こんな大きなものを受け入れるのかという懼（おそ）れの気持が左知子にも兆した。
「あーもうだめだよっ」
樹里が切迫した声を出した。
「なに、もうよくなっちゃったの」
ぐいっとしごいてやったら、樹里は一気に放った。上からかぶさるように顔を近付けていたので、唇のあたりにびっと暖かな体液が突き当った。“あっ痛っ”そんな思いがあった。
びっくりして左知子は手を離してしまった。
左手にティッシュペーパーを用意していたのにまるでそのことは忘れていた。顔を避けるのが精一杯であった。“あっ”と思う間もなく、続いて白い体液が、飛び散るように射出された。
少年は「わーっ」と奇妙な声をあげた。腰を突

き上げるようにした。二人とも、大慌てに慌てていた。もう一度、この場で起きたことを頭の中に呼び起すことなど到底不可能であった。
力の滾（たぎっ）た、その一瞬の肉体の反応を前に左知子はことばをのんだ。
感動すら覚えていた。
しばらく、あらぬ空間に眼を据えていた。
「ぼく、死ぬかと恩った。凄えの、なんの、部分品がさ、ぱらぱらになって吹っ飛んだって感じ」
「まだちゃんとあるじゃないの」
左知子にしてはまともな答え方であった。
強い衝撃に打たれていたのは左知子のほうだった。ちらと左知子はこの少年と体を合わる時のことを考えた。
この家には樹里の他に誰れもいない。手取り足取り、性の儀式をこの場で執り行なうことだって出来る。
だが、下腹の張りは今日も不快な感じを作っていた。“どうせいざとなったら傷跡は痛み出す”この前の隣家の男とのことで懲りていた。
つい、気持が消極的になった。
「先生、ほんとにさせてくれるの？ぼく、先生に童貞を捧げる気あるんだよ」
「生意気言っちゃってえ。捧げるとはおそれ入ったねえ」
いつの間にかＣＤの曲は終っていた。自動的にスイッチが切れていた。
「あーあ、これじゃ後始末がたいへんだあ」
左知子は口のあたりの汚れを拭き取り、さらにもう一枚のティッシュペーパーで、まだ裸のまま突き出された少年の性具を清めてやった。
その時、じっくり観察した。
指でしっかりと握り、包皮をもう一度きっかりと剥いた。それからきれいにしてから、露頭部に

ちゅっとキスをしてやる。
「わたしの可愛い子ちゃん」
おどけてみせたが、左知子はちゃんと唇の触感を楽しんだ。握り締めている感じもしっかり記憶しておこうと思った。
もう、少年は半身を起していた。それで左知子は少年の股間に顔を埋める恰好になった。
「樹里はまだおネンネだから、舌できれいにしなくちゃね」
キスだけでは足りず、左知子は猫のように舌先でペロペロと少年のものを舐めた。
愛おしくなっていた。饐えた匂いがあったが、むしろその匂いに左知子は興奮した。
「ほんと、食べちゃいたくなる」
一度放ったら気持がすっきりしたのか、樹里はそんな左知子をかなり冷静な眼で見た。
「くすぐったいよお。そういうのって」
邪険に、左知子の頭に一つ、ごつんとげんこつをくれた。それでも止めずにいたら樹里は今度は本気でごつんごつんとやった。
「いたた。止めてったら」
顔を上げた左知子は怖い顔になっていた。樹里も唇の端を歪めた。なぜだか、そこで左知子はもてなし顔になった。佐知子は笑ってみせた。
「やっぱり、樹里は赤ちゃんでないかじゃないんだわ」
語尾が捨鉢な口調になった。一メートル七十もあるのだから子供のはずはなかった。
ただひょろひょろと一人前に背が高いだけだと思っていたのに、樹里はもう暴君の顔になっていた。なにより、立場を言えば、雇う側と雇われる側である。ほんとうに、樹里の成績がぐんと上らないことが理由でクビになりかけていたのであれば、これは貸し借りの関係になる。

左知子は少年のご機嫌をとっている自分が嫌になったが、最後までお追従（ついしょう）笑いの態度は崩せなかった。それだけではない。樹里のものを拭きとったティッシュペーパーで、畳の上に飛び散った白い体液を拭った。

「いったい、何万匹虫いるのかしら。わたし、精虫を掴まえておいて家で飼おうかな」

半ば本気であった。

「これ、記念品にもらっとくね」

左知子はティッシュペーパーのくしゃくしゃになったのを、ポロシャツの上着のポケットにしまい込んだ。

「もう死んでるのに」

「ばーか、三日間は眼をむいて生きてるって言うよ。知らないの」

「気持わりーい。精虫飼う気なんだ」

もう、樹里は機嫌のいい少年に戻っていた。

間もなく、母親が外出先から帰って来た。

それで、威儀を正した家庭教師に戻り、二人は勉強の真似事をした。母親が西瓜を乗せた皿を持って顔を出す。母親が部屋を出て向うへ行ってから左知子は小声で樹里に言った。

「やっぱ、この分だと、ほらメキシコの太陽神に真剣にお願いしなきゃね」

「ほんとうに、あいつの家、燃えてしまうのかなあ」

「樹里の信心次第よ。毎日、昼の十一時にね、願を懸ければいいの」

「まったく、やってられないよ」

樹里は呆れたふうに左知子の顔を見た。二時間の学習を了えた時、樹里は「今日はよかったあ」と告げた。

帰り際、母親が、外の空模様を見て傘を持出してきたが、左知子は断わった。

「この分だと一雨来るかも知れないわよ。わたしも雨が降ったらたいへんだと思って早目に帰って来たの」
四十に近かったが、樹里の母親はそれより若く見えた。母子は相似形で、細身で背が高かった。見下されているような気がした。今日は収穫品を手に入れた気になっていた。

4

喜多院の境内は避け、表通りに出た。自転車をサンロードの賑やかな通りへと走らせる。
銀行で金を引き出す用事があった。
家庭教師の臨時収入、夏の手当分が四万円入金されているはずであった。銀行で金を引き出す。名を呼ばれ、現金を受け取る。
帰ろうと思った時、見覚えのある顔に出喰わした。細く、吊り上った眼。あの放火犯人の男に違いなかった。左知子は胸がどきりとした。
左知子は再び、銀行の待席に坐った。
この男を見かけた日から四日が経過していた。キャシュボックスの一台が故障し、係員が窓口支払いの方法をすすめたので、この若い男も出金票に必要事項を記した。左知子と同じことをやった。番号札を貰い受けた男は、左知子の斜め前の席に坐り、週刊誌を手にした。
左知子はじっと耳を澄ましていた。
男の名が呼ばれるのを待った。
何人かの名が呼ばれたのちにこの男が立上った。「ヤマギシさん、ヤマギシタクロウさん」その名が呼ばれた窓口に立ち、男は通帳と金を受け取った。男の名は〝ヤマギシタクロウ〟というのだった。
左知子は男のあとを尾けるつもりであった。

背後につき、銀行の表に出た。男は原付きのバイクにまたがった。小型バイクだったが、自転車ではかなうわけもなかった。十メートル道路に出ると快調にエンジンをふかせて、ぐーんと車間距離をあけた。左知子は責色いバイクのプレートナンバーだけを眼に止めた。

川越市××—××、数字を頭の中に入れる。本川越駅前の雑踏に紛れてバイクは姿を消した。それでも、この出会いは大収穫であった。男の名前とバイクのナンバーがわかったのだ。たとえ、名前とバイクの持主の名が違っても、男の素姓を割り出す手掛りには充分になるはずであった。

家に着いた頃に、雨がぽつぽつと降り始めた。部屋の奥から梯吉が呼んだが、左知子は無視した。何か用事を言いつけられて、おのれの手を使うのが嫌だった。樹里のものを握り締めた右手の感覚を大事にしたかった。それで、玄関口を上ったところにある階段を上り、二階部屋に一人寵った。胸のポケットから、ぐしゃぐしゃになったティッシュペーパーを取り出す。

「ああ、ピンセットが欲しいな」

そんなことをひとりごちた。見えるわけはないのに、しわしわの紙の間に巣喰っている精虫たちをつまみ取る気になった。まだ、テッシュペーパーは湿気を含んでいた。左知子は押し開き、匂いを嗅ぎ、それから舌先で舐めてみた。若い男の子の体臭が残っていた。

「これで赤ちゃんだって生めるわけだ」

やっぱり独りごちた。

そう考えたら、真似事がしてみたくなった。

まだ、少年の射精の瞬聞を目撃した生々しい感情も余韻としてあった。

雨の音が、ぱたぱたぱたととたん屋根を打ち始めている。その時はまだ雨の音はそれほど左知子

の耳には入っていなかった。
左知子は、さっき、構里の股間にそそり立つものに触れた指で、そっとおのれの秘部に触れてみた。なんだか、二つのものが一つにつながれているような気になった。
いや、まだ生きているに違いない精虫たちが自分の指先で躍っているような思いを持った。
ほんとうに赤ん坊が欲しいなんて考えているのではない。精虫たちに彼女は愛着の気持を持ったのであった。貴重なものを手に入れた気になる。
触れているうちに、どうしても和彦に会いたくなった。抱かれたくなっていた。抱かれなくったっていい。和彦に会ったら気持が昂まり、自慰のあそびがもっと違ったものになるだろうと思った。和彦の顔が見たくて、このところ辛い日々を送っていたのだ。外を見たら、雨が降り落ちて来るのがはっきりと見てとれた。
階下に降りたら梯吉がまた呼んだ。
「おい、おしめを取り替えてくれ」
「ちょっと急用なの、すぐもどって来るから」
「おーい、左知子っ…」
背後で呼んでいたが、左知子はかまわず表に飛び出した。傘は持たなかった。
公衆電話ボックスまで小走りに走る。“あー、やっぱり痛くなってきたわ”片手で下腹を押さえた。家から遠ざかると、一時も早く、和彦に会いたかった。声を聞くだけでもよかった。
会いたい思いだけが募っている。
電話ボックスに十円玉を続けて三枚落す。努めて右手は使わなかった。神聖な右手だった。左手で十円玉を入れ、受話器は首に挟み込み、ダイヤルも左手で回した。ブーブーブーと発信音がした。七度鳴った。
まだあきらめなかった。“お願い、和彦出てちょ

うだい”そう祈ったが、留守なのか、いつまでも発信音が鳴っていた。
その時、急に雨が強くなった。
四つ辻の東西に伸びた四メートル幅の道路に雨が走っていた。電話ボツクスの際（きわ）の青桐の樹にも雨が打ちかかり、桐の葉がぱちぱちと痛そうな音を上げた。
やっと左知子は受話器を受口に戻した。
かちんかちんと三つ音がし、十円玉が返却口に正確に返されたが左知子は十円玉を拾わなかった。放心の態であった。
「なによ、電話口に出たっていいのに」
見当外れのことを口にしていた。
そのまま、受話器の黄色いボックスの上に上体をかぶせ、外の雨の光景を見ていた。
透き通ったガラスの窓枠が、左知子の眼の前にあった。その長方形のガラス面にも雨が降りかかってきて、やがて、雨粒はすーすーと糸を引き降下し始めた。“家になんか帰りたくないわ”
右手の指を五本揃え、その指を口に持って行った。唇に触れる。指先には少年そのものの精虫とやらの匂いが、まだ、残っている気がしていた。
家に帰れば……。梯吉の萎えた性器に触れなければならない”と思うと帰るのが嫌だった。
それで、いつまでも雨が降る様を電話ボックスの中から眺めていた。
左知子は電話ボックスの中に閉じ込められていた。左知子の息が寵り、ガラス面の内側が曇った。雨の粒が吹き寄せられ、外側は鈍く光っている。水滴と水滴がくっつき、つーつーと滴り落ちて一筋の流れの跡がつくられた。
一粒一粒、水滴を押し止どめておきたくなり、内側から曇った面にぴったりと掌をかぶせた。
ちょっと正気の部分を失なっていて、真剣に滴

り落ちる雫を捉えにかかった。
はじめは面白くて、稚気な声をあげていた。
「こいつぅ」雫を受ける仕種をする。　今度は指でつまもうとした。そのうちに左知子は哀しくなって来た。みんな逃げて行く。
空しい遊びをしていることにやっと気付いた。
とても、哀しくなった。冷たい雨に打たれている可哀想な女の子の姿が眼に浮かんだ。電話ボックスに守られているので左知子は雨に濡れることはなかったが、もう全身がぐっしょり濡れているような思いになった。眼のあたりがぽわーっと暖かくなり、左知子の見ている雨の情景は俄かに霞んでしまった。頬を伝って泪が溢れ出た。
“可哀想な女の子が泣いているんだわ”　そんな眩やきを洩らす。もう、和彦のことはあきらめようと思っているのに、泪ばかりは止めどもなく流れた。その時、電話ボックスの近くで車が止まり、一人の男が雨中を飛び出して来た。
「おい、電話を掛けたいんだよ、雨宿りの場所じゃないんだから代ってくれよ」
左知子は男の顔は見なかった。
乱暴な男の声にその場所から追い立てられた。
電話ボックスを出ると、大粒の雨が一気に左知子の体に打ちかかった。
「おい！十円玉が残っているよ」
男が背後で叫んでいる。
痛い雨に全身を叩かれていた。すぐに雨は左知子の髪や着衣をぐしょ濡れにした。雨の雫が顔面に滴り落ちて来るので、何度も左知子は右手で顔面を拭った。右手の中の神聖な若者の匂いは消されていた。
視野の先で、雨ばかりが降り募っていた。

（第四章　了）